

強者の戦略

《解説》

オランダを問う問題では、主なものだけでも東大1993年、東京都立大(現首都大)1993年、一橋1994年度、京大1996年度、阪大2004年度などがあり、そして2010年の東京大学、などオランダ史は多くの大学で出題される、世界の一体化を象徴すべき問題の一つとなっています。

各大学に若干の違いはありますが、多くはオランダが世界で活躍し「覇権国家」となり、また下り坂となっていく17世紀の記述を外すことはできないでしょう。

「覇権国家」というのは、アメリカの社会学者ウォーラステインが唱えた「近代世界システム」という考え方の中にできます。単に各国を見るのではなく、世界全体を一つのシステムとして見る考え方です。豊かな資本や高い技術をもつ「中核」という先進地域の中で、圧倒的な経済力を誇り覇権を確立した国家のことをいいます。17世紀のオランダ、19世紀のイギリス、20世紀のアメリカ(およそヴェトナム戦争くらいまで)がこれに該当します。論述、とくに東大や阪大は世界の一体化やネットワークが好きですから、この3国はちゃんとおさえておくべきでしょうね(2008年の東大はパクス=ブリタニカでしたしね)。

今回の問題の場合、16世紀から17世紀となっているので、16世紀のことも書かなくてはならず、これが少し難しいところでしょう。16世紀といえばハプスブルク家の支配下で中継貿易で栄え、後半は宗教対立が一つの引き金となった独立戦争がおこっています。このときアントワープが陥落して、17世紀にはアムステルダムが金融の中心になりますね。独立戦争が一区切りついたところから、オランダは外へでて活躍をはじめます。

また「世界の商業的覇権」とあるので、政治史ばかりに言及してもいけませんし、指定語句をつなげることに終始してはいけません。指定語句は、出題者が、この用語はどう使うのだろう、ということを見たいわけですから、当然重要な箇所で使用すべきでしょう。だからヒントにはなりません。しかし、あくまでもそれは文を構成する「材料」にすぎないのであって、指定語句のみ中心で文を作ろうとしてはいけません。そこは注意してください。

「世界の…」とあるので、どれくらいオランダが世界にネットワークをもっているか、それを考えてみましょう。資料集などをお持ちでしたら、それを広げてみてください。

ざっと挙げるだけでも、意外と忘れてしまいやすいバルト海、北海、東南アジアならバタヴィア・マラッカ・モルッカ諸島(アンボイナ事件も)、その他アジアを見るとセイロン島、台湾、日本(江戸時代)、中国、アフリカではケープ植民地、などがあがるでしょう。他にも南米にプランテーションを持っていることや、奴隷貿易をやっていたことなども忘れやすいところです。

そもそも指定語句にはジャワの「バタヴィア」や「ニュー・アムステルダム」が出してあるので、ヨーロッパのみならず、世界の商業覇権を握ったグローバルな視点を必要としていることもわかるでしょう。

さていかがでしょうか。今年の東京大学はこうしたことを踏まえた上で、「このようなオランダおよびオランダ系の人びとの世界史における役割について、中世末から、国家をこえた統合の進みつつある現在までの展望のなかで、論述しなさい」となっています。基本知識はすごく大事ですね。では解答例です。

強者の戦略

《解答例》

ネーデルラントは毛織物や中継貿易で栄えたが、スペインの圧政や新教徒弾圧により、オラニエ公ウィレムを中心に北部のユトレヒト同盟が独立運動を展開、1581年ネーデルラント連邦共和国の独立を宣言、1648年ウエストファリア条約で国際的に承認された。1602年に東インド会社を設立、バルト海地方への穀物供給や造船、北海ではニシンなどの漁業で栄え、バタヴィアやマラッカを拠点に東南アジアに進出、1623年にアンボイナ事件で英を駆逐して香辛料貿易を握った。セイロンや台湾・ケープ植民地も領有、中国や日本とも貿易を行った。南米ではプランテーションを経営、北米ではニュー・アムステルダムを中心に植民地を領有、アフリカ西岸からの奴隷貿易も行い世界に商業網を巡らせた。アムステルダムは国際商業の中心となり金融も支配した。しかし17世紀後半には香辛料価格が下落、英の航海法を契機に英蘭戦争となり、仏のオランダ侵略戦争などもあり次第に衰退した。(400字)

これから東大や京大など難関国公立を目指す方は、まず知識をゆるぎないものにしてください。それがあつた上で論述対策が生きてくるのです。

では、研伸館の教室授業の「論述世界史」、E-Lectureの「京大スパルタン」(9月からは「東大スパルタン」も開講)もよろしく願いいたします。

チーム・スパルタン 北林久忠